

初級日本語学習者の接続のマーカ―としての「と」と「じゃあ」の習得

坪根由香里 坂田陸深

要旨

初級日本語学習者の使用する順接・添加の接続表現を収集・分析し、中間言語として学習者が順接・添加の接続詞の代わりとして用いた「と」と「じゃあ」についての分析を試みた。結果として学習者が接続詞のかわりに「と」と「じゃあ」に様々な機能を持たせて使用している実態が観察できた。「と」は「and」のように文と文を並列・継起的につなげるものとして、多くは使用されていることがわかった。また、「じゃあ」に関してはいろいろな機能を持たせて使用していたのが、徐々に機能が絞り込まれ、やがては他の接続表現の正しい使用へと移行していく習得過程の一つの仮説を提案した。加えて、学習者が順接・添加の接続詞の代わりに「と」と「じゃあ」を多用した要因についても考察を試みた。

【キーワード】 順接、添加、接続表現、移行標識、保留標識

1. はじめに

初級日本語学習者の中間言語を分析すると、前文と後続の文との関係付けのために、なんらかのマーカ―が必要な場合、使用される接続表現の種類は少なく使用頻度も低いということが分かった。しかし、接続表現の代わりに他の方略で話を進めているはずだと考え、学習者が多く使用していた「と」「so」「じゃあ」が順接、添加の接続表現の代用をしているという仮説をたてた。本研究では、学習者が用いた順接・添加の接続表現を分析した後、代用されたマーカ―として数の多かった「と」「じゃあ」について、どのような接続状況で使用されているかを分析し、接続表現の豊かでない初級学習者がどのような方略を使ってそれをカバーしているのかについて考察する。

2. 調査の概要

2.1 調査の対象

国際基督教大学日本語プログラムで1994年9月から1995年6月までの10ヶ月間、日本語を学習した初級学習者3名（学習者A、M、R）。学習者Aのみが更に1995年9月から1996年6月まで学習した。3名とも男性で日本人も住む寮

で生活している。母国語は英語（学習者M）、オランダ語（学習者A、R）である。学習者Aのみが自国で6ヵ月間（1.5h/w）学習した後来日したが、3名とも初級初めのクラスに入り、いわゆる「スロー・ラーナー」であった。

2-2 調査の方法

2-2-1 音声資料

1995年1月から1995年6月までの6ヵ月間に、音声資料を5回収集した。ただし、学習者Aのみは1996年6月に2回追加して実施した。

インタビュー、ストーリー・テリング（3枚の絵を見て描写する）、スピーチの3つで合わせて30分前後のものをビデオに録画し、それを文字化した。文と文をつなぐ何等かの接続マーカを学習者が出している時を接続表現使用時と考え、その部分をデータとして抽出した。そこから、「と」「じゃあ」の使用部分を取り出し、学習者がどんな接続状況で使用しているかを分析した。

学習者にはインタビュー後にフィードバック・シートを渡し、接続表現だけでなくインタビュー中の誤りを指摘した。尚、学習者Aに対しては第6、7回のインタビュー時に、接続表現についての文法的なCR（意識化）と学習方略に関するCRを行った。

2-2-2 文字資料

参考資料として1994年11月から1995年6月の間に行ったテスト（7回）と作文について同じように分析した。ただし、作文については提出回数に違いがあり、特に学習者Mは少なくなっている。

3. 接続表現使用の全体的傾向

広利（1993）や江原（1995）による初級学習者の接続表現の習得研究において、特に順接・添加の接続詞の使用頻度は低く正用率も高くないということが言われているが、本研究の結果もそれを実証するものであった。

本研究では、全体を通して接続詞は少なかったが、正しい接続詞の代わりに「と」「じゃあ」「so」を用いられることが多かった。しかし、その使用には個人差が見られた。このうち「so」に関しては、3人のうち学習者Rが多く用いていた。そしてその用いた文を分析すると、「それで」「だから」の代わりに使用されていた。「じゃあ」については学習者AとMが使用、学習者Rは使用していない。これは「so」の使用とも関係があるのかもしれない。「と」については全員が使用している。

複文の方が習得のステージが遅いという研究結果（広利1993）もあるが、複文の方が本研究での調査では正用が多かった。これは学習者にとって複文の接続表現は接続の形を学習させるために口頭練習をすることが多く、また日本語母語話者の複文の接続表現使用を多く耳にすることから、正用が多くなったと思われる。

4. 「と」と「じゃあ」の分析についての先行研究

桑原（1995）は「と」について「フィラー」と言う用語を用いず不適切な「あそび言葉」とした。そして「とー」が学習者の発話に現れ、しかも多用されているとし、「and」との同一視の結果ではないかと論じている。更に10代の若者言葉に「とー」という遊び言葉が存在することについても言及した。この日本人母語話者のいう「とー」は「それとー／そうするとー／えっとー」などの初めの部分が脱落したもので、学習者はこの「とー」という言葉を耳にすることがあり、それによってこの「とー」を遊び言葉として用いていると述べている。「じゃあ」についても桑原は接続詞としてではなく遊び言葉とし、「じゃあ」が多用されていること、学習が進んでもなかなか矯正されないことを指摘し、その原因として英語の「well」と「じゃあ」との混同のためではないかと分析している。

上述の先行研究を踏まえ、本研究では母語話者のものとは異なる「と」と「じゃあ」について、広くいろいろな接続表現の代わりに用いている、或いは一つの接続表現が表わす機能を超えて使用している実態に焦点を置き、どのような用い方をしているかを分析したい。

5. 「と」

5-1 学習者の使用した「と」の機能と使用例

学習者の使用場面を分析した結果、以下の1)～6)に分類される。

- 1) 「継起／同時」的な事柄・動作を結ぶ（時間的に続いておこるもの）
「家族は、おかえりなさいと言いました。とお父さんは自分、ただいまと。」
「ご飯とジャムとコーンフレークと私は食べる、と刺身をみました。」
- 2) 「並列的」な事柄・動作を結ぶ（時間的な関係はなく、ただ並べるもの）
「朝ご飯を食べると、食べると、テレビをみます」
- 3) 「情報添加」（情報や意見などを付け加える）

「オランダで私は経済の勉強をします。と、クラスは大きいです。」

4) 「前提・結論／原因・結果」の関係を表わす

「政治は銀行にたくさん決まりをしました【中略】(決まりを作りました↑))
) 作りました。そうそう。作りました。お、もちろん、作りました。(う
 ん) と、オランダで銀行はたいてい安全です」

5) それた話を元に戻す

「この男性は部下がつまらない、でしょうか。先輩でしょ↑後輩、後輩かもしれ
 ない。と、後輩は飲みたくない、そうですけど。」

6) 逆接

「中国語と日本語と漢字を読みます。書きます、とオランダで書きません。」

5-2 「と」の結果と考察

「と」誤用使用割合推移

表1 学習者A

	1	2	3	3'	4	5	6	7
継起/同時	0	1	11	6	5	3	3	1
並列	11	1	8	12	5	14	4	8
情報添加	0	4	3	7	3	5	3	4
前提結論	0	2	2	3	1	4	1	2
話題戻し	0	0	4	0	2	2	2	0
逆接	0	0	1	1	0	4	0	0
計	11	8	29	29	16	32	13	15

表2 学習者R

	1	2	3	4	5
継起/同時	0	1	5	1	2
並列	3	2	7	2	7
情報添加	0	0	0	1	1
前提結論	0	0	0	0	1
話題戻し	0	0	0	0	0
逆接	0	0	0	0	1
計	3	3	12	4	12

表3 学習者M

	1	2	3	4	5
継起/同時	0	0	0	0	0
並列	1	1	0	3	1
情報添加	0	0	0	0	0
前提結論	0	0	0	0	1
話題戻し	0	0	0	0	0
逆接	0	0	0	0	0
計	1	1	0	3	2

学習者別に「と」をどんな接続状況で使用しているかを表わしたものが表1～3である。共通して言えることは「継起」「並列」に主に使われていることである。また、学習者Aについて見ると、他の二人と比べ「情報添加」「前提結論」「話題戻し」の接続状況でも「と」を多く用いているのが特徴的である。学習者Rにおいては「継起」「並列」がほとんどを占める。つまり、「そして」や「それから」で言い替えることができるものがほとんどである。「前提結論」で使用している「と」も「日本人では親切な人がある、と親切じゃない人がある。と、一つのイメージはありません」のようなもので、「だから」とも「そして」とも置き換えられるものだった。学習者Mは全体的に「と」の使用が少なく、言葉を探しているような状況で使用していたが、そのほとんどを「並列」として使用していた。つまり学習者Rと学習者Mはかなり規則的に、「と」を「そして」や「それから」の代わりに使用しているということがわかる。これに対して、学習者Aは「と」を多用しており、しかもそれは「そして」「それから」の代わりに限定されず、「それで」「それに」「だから」

「それでは」「でも」などと置き換え得るものまでであった。学習者Aは「と」についてCRで、「と」は名詞と名詞の場合だけで、文と文の時には「～て」（て形）を使う。でも時々自分は「and」の意味で使ってしまうことがある、と自分の「と」の使用を分析した。

学習者の誤用である「と」について考察してきたが、その誤用の要因は、「and」に起因するものや「（えー）とー」「（それ）とー」などからのものが考えられるということは先に述べた。ただし、調査では学習者の「と」のイントネーションは、「（えー）とー」「（それ）とー」などとは異なっていた。このほかの要因として、学習者は「条件」の「と」のような形容詞・動詞の辞書形やマス形に接続する「と」も耳にしていると思われ、そのために形容詞・動詞に「と」を付けた形を取り込んでいる可能性もある。

6. 「じゃあ」

6-1 学習者の使用した「じゃあ」の機能と使用例

浜田(1991)、桑原(1995)を参考にし、学習者の使用したものを分析して、「じゃあ」の本来の機能と誤った使い方としての機能を分類した。尚、学習者の「じゃあ」の正用の習得過程については後述するが、分析にあたり上記文献を参考に分類した機能は1)新しい話題の開始、2)最終発話交換の開始、3)選択候補の提示、4)推論の伝達・確認、5)推論の補充の要求、6)自分の態度の伝達・表明である。⁴⁾

日本語学習者の誤った使い方としての機能とその使用例

1) 応答、話題展開の一時的保留⁵⁾ (以下、「保留」とする)

「外に窓が、外に庭があります↑soたぶん、あのじゃあ、名前ああ(ん↑)この、たぶん男、男の人のうちでしょう↑でも部屋の名前わからない。」

2) 自分の発話の訂正 (以下、「訂正」とする)

「この人は頭がこの人の頭がねります。【寝ているジェスチャー】ねります。(ねります↑)ねります(あっ寝ます)じゃあ、寝ます。」⁶⁾

3) 自分の発話の修飾 (以下、「修飾」とする)

・先行文の内容についての自分の意見を付け足す。

「兄は、ピアノを弾きます、弾きます、ピアノを弾きます。と、じゃあ、たぶん、ピアノを弾くのが下手です。」

・先行文の内容について別の情報を付け足す。(主に「そして」の代用)

「皆、人はオランダで10年間の前に、10年前にはじ、あのゴルフをしました。じゃあ、いつもでもはやい、はやい増える。」

・先行文を理由/原因として結果/結論を付け足す。(主に「だから/それで」の代用)

「うん、あと、泳ぎますね。泳ぎますが好き。じゃあオランダでいつも大学のあの、第一授業の、前に(授業はね、一時間目)一、一時間目、泳ぎます。」

・先行文の内容を具体的に例示して述べる。

「日本の文化は面白い。じゃあ、侍、あの、侍の歴史は面白いでしょう。」

4) 自分の発話の置き換え(以下、「置換」とする)

「毎週末に教会に行かなくてははいけませんでした。(いやでした↑)うん。じゃあ、両親は私に教会に行か、行かれました↑【中略】行かれました。」

5) 提題内の話題の小転換(以下、「転換」とする)

・保留していた応答を導入する。

「(親切ですね↑はい。どんな人でしたか↑)んーおかしさん、おかしさんとおとさんと弟さんとお姉さん。(お姉さん)はい(はい)じゃあ、まあ親切です↑」

・同じ提題内で少し内容を変える。(主に「それで、それから」の代用)

「Aさんはたくさん勉強しなくてはいけません。うん、じゃあAはA、Aさんは、Aさんは、日本で寮に住んでいます。」

・元の話題に戻す。(主に「それで、それから」の代用)

<お見合の絵の説明で> 「男の人がスーツをきります。【中略】おう、やっぱり着ます。(うん)ごめんなさい。じゃあ、あの、と、ここ、ここに、ここで、あの女の人があの、お母さんのうちに帰りました。」

・ストーリーラインからずれる

<苦情の絵の説明で> 「お母さんは、あーたぶん、あつ、お茶とお茶と、じゃあ、ご飯、名前は何ですか↑」

6) 応答の開始(以下、「開始」とする)

・質問に対する答えの話し始めに使用。(自問自答にも使用)

「(これラジオですか↑)じゃあ、たぶん、お、違う、わかります。ピアノ。」

7) 話の終結(以下、「終結」とする)

「あの会話であまり元気そうじゃなかったけど、元気になりました。となりま

したと、になった。じゃあ、終わりました。」

桑原(1995)によると、「じゃあ」は新たに話題を導入したり、転換したりするときなどに現れる移行標識としての機能を持つ。英語の「well」は、この移行標識としての機能と、応答をいったん保留する場面で、話し手が相手の言葉を受けて何らかの発話をしようとしている意志を示すマーカーとして働くという保留標識としての機能を持つ。桑原は、学習者の「じゃあ」の間違いは、この「well」の保留標識の機能をあてはめているのだと述べている。

本稿の分類における「じゃあ」の誤用は、①日本語の「じゃあ」が本来機能を持たない「保留標識」として使用しているもの。②「じゃあ」が「移行標識」という機能を持つことを認識しているが、間違った移行状況で(正しい使い方を拡大して)使用しているもの、の2つに大別される。誤った使用例の1)~4)は①、5)~7)は②の誤用である。5)の誤用は「新しい話題の開始」と「提題内の話題の小転換」との混乱、つまり、全く新しい話題ではなく、同じ提題内で少し内容が変わったり、話題からずれていたのを元のストーリーラインに戻す場合に使用している。正しくは「それから」「それで」を使用すべきところが多い。このような「じゃあ」と「それで」「それから」は文脈によっては二つが使える場合もあるため、「それで」「それから」のところに「じゃあ」を使っているのが、今後「それで」「それから」に正しく分化していく上で、使用上の混乱があるものと予想される。

「あれ大好き言葉。いつもビデオで(うん)むかーしむかーし、面白い。じゃあ、あの、女性は電車で乗っています。」(「それで」も可)

「オランダの発音は、あの、Rが強いです。【中略】(うん)えー、じゃあ、他にはそうですね。」(「それから」も可)

次に6)は「新しい話題の開始」と「応答の開始」との混乱である。つまり、新しい話題を自分から切り出すのではなく、相手の質問の応答の話し始めにも使用してしまうものである。

7)の誤用は最終発話交換の「開始」ではなく、話の終結そのものとして使われているため不自然に感じられる誤用である。

以上の5)~7)は「じゃあ」の正しい使い方に近い誤用で、学習者の意識としては「移行標識」として使用しており、正しい用法を拡大解釈すること、即ち、過剰般化の誤用と言える。

次に、学習者の正用・誤用を数字で見ていく。

「じゃあ」正誤用使用割合推移

表4 学習者A

		1	2	3	3'	4	5	6	7
正用	正用	0	0	2	10	9	13	7	12
誤用	転換	1	0	2	5	1	14	1	2
	開始	0	0	1	2	1	1	0	0
	終結	0	0	0	1	0	1	2	1
	保留	0	0	0	2	0	2	0	0
	訂正	0	0	1	0	0	0	0	0
	修飾	0	0	2	3	7	20	10	7
	置換	0	0	0	0	0	0	1	1
計		1	0	8	23	18	51	21	23

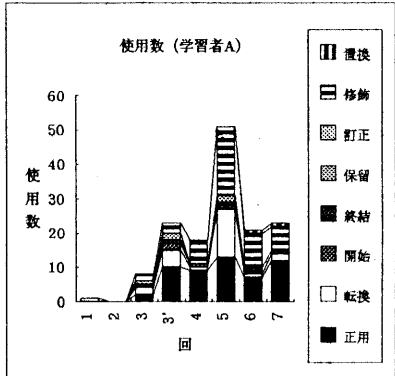


図1 学習者A

表5 学習者M

		1	2	3	4	5
正用	正用	1	0	4	4	0
誤用	転換	0	0	3	6	0
	開始	0	0	6	2	0
	終結	0	0	0	0	0
	保留	0	0	0	1	0
	訂正	0	0	0	0	0
	修飾	0	0	2	5	0
置換	0	0	0	0	0	
計		1	0	15	18	0

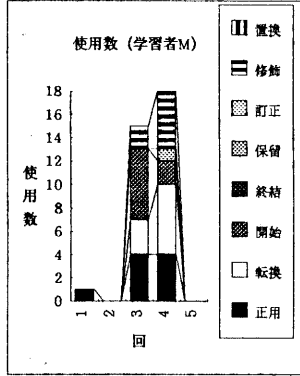


図2 学習者M

「じゃあ」正用使用割合推移

表6 学習者A

		1	2	3	3'	4	5	6	7
発話開始		0	0	1	8	6	8	7	11
最終発話		0	0	1	0	1	0	0	0
選択候補		0	0	0	0	1	1	0	0
推論伝達/確認		0	0	0	1	0	1	0	1
推論補充		0	0	0	1	0	0	0	0
態度表明		0	0	0	0	1	3	0	0
計		0	0	2	10	9	13	7	12

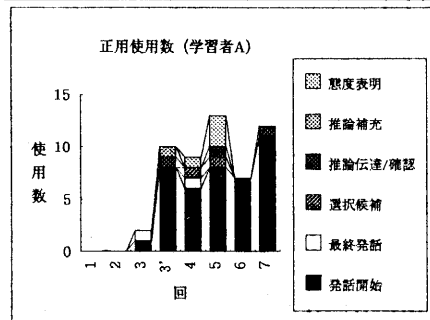


図3 学習者A

表7 学習者M

		1	2	3	4	5
発話開始		0	0	4	3	0
最終発話		0	0	0	0	0
選択候補		1	0	0	0	0
推論伝達/確認		0	0	0	1	0
推論補充		0	0	0	0	0
態度表明		0	0	0	0	0
計		1	0	4	4	0

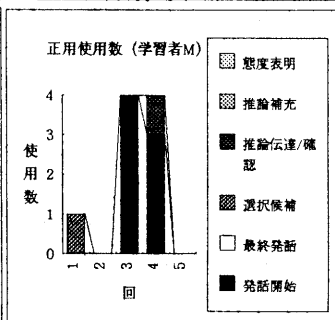


図4 学習者M

表4,5、図1,2は学習者別に「じゃあ」の正誤用（機能別）の推移を表したものの、表6,7、図3,4は正用機能の使用数の推移を示したものである。

まず、「じゃあ」の正誤用の推移については、学習者A、Mとも1回目に一度「じゃあ」を使用、2回目は「じゃあ」の使用がなく、3回目から急に使用回数が増え、このころ外部から「じゃあ」を取り込み始めたと推測できる。両者共通して多い誤用は、「転換」「開始」「修飾」である。うち「転換」「開始」は「移行標識」としての機能を過剰般化して使用しているものである。

「保留標識」としては「保留」「訂正」「置換」は少なく、専ら「修飾」で使用し、然も増える傾向にある。桑原（1995）でも「保留標識」の中では「修飾」が最も多くなっている。これは他の接続表現を知らないために「じゃあ」で多くを代用したことも一因となっている。

5回目までを見ると、両者とも誤用の種類は増える傾向にあり、特に「転換」と「修飾」が多いが、学習者Aの6、7回目を見ると、誤用の種類は減り、「転換」も減少している。6回目後のfollow-up interviewで「じゃあ」について若干コメントしたためか、7回目は更に「修飾」の割合も減っている。尚学習者Rの使用は「転換」の誤用1回のみだったため、考察からは除外した。

次に、正用機能の使用数の推移（表6,7、図3,4）を見る。学習者Aは、1995年に行った3回目～5回目では様々な機能を使用していたが、1996年に行った6、7回目ではほぼ「新しい話題の開始」で占められている。これは誤用の方も、「保留」「訂正」「開始」は6、7回目には見られなくなり、バリエーションが少なくなっていることと一致している。つまり、3回目～5回目では「じゃあ」の使用が様々な機能に広がっている時期で、その中に正用も誤用も含まれていた。その後、使用状況が限定されるようになり、いくつかの使用に収束し始めているものと思われる。学習者Mも少ない使用ではあるが、やはり「新しい話題の開始」が多くなっており、少なくともこの二人の結果からは、「じゃあ」の機能で最も習得が早いのは「新しい話題の開始」と言える。

7. 結論

接続表現の豊かでない初級学習者は、添加、順接の場面で「と」「じゃあ」を多く使用していたが、その使用には違いが見られた。

先にも述べたように桑原(1995)は「と」が使用される原因として「and」と「と」を同一視してしまうということ挙げているが、本研究においても「と」

は文と文を並列・継起的につなげるものとして主に使用されており、「and」を使うような感覚で多くは用いられていることが伺えた。ただし、学習者Aのように並列・継起以外にも幅広く「と」を使用している者もいた。「と」の幅広い使用は、「と」が耳慣れた音であり、一方学習者は適切な接続表現である「そして／それから／それで」などの使用に至っていない、言い替えればそれらの接続表現がまだ確実に習得されていないためその代用として使う、と考えられる。

「じゃあ」について、桑原(1995)は「well」の混同とし、「じゃあ」が本来持たない保留標識としての「well」の機能を「じゃあ」に適用したことが不適切な「じゃあ」の原因であるとしている。桑原は、「不適切な「じゃあ」は英語の「well」の保留標識としての機能のどれかに当てはまる」としているが、本研究の結果を見ると、移行標識として使用しているが使用する状況が間違っていると判断できる誤用も見られた。

「じゃあ」の習得過程については本研究で見える限りの傾向としては、2人の学習者から得た結果ではあるが、次のようなことが言えるのではないかと。①初め全く使用していなかった「じゃあ」をある時期突然、しかもいろいろな状況で使いはじめる。この時期には何らかの「転換」の場面で多く使うようになる。②「修飾」としての使用が増え、発話と発話の間に入れるものが見つからないときの接続表現の代用語として広く使用する。③「転換」の誤用が減少し、「移行標識」としての過剰般化の部分が狭まる。④「修飾」の誤用が減少し、正用率が上がる。ただし、学習者Mは、データが5回目までのため、まだ「じゃあ」の使用が様々な機能に広がっている段階で、収束の段階にはさしかかっていない。今後は以上に述べた「じゃあ」の習得過程を仮説として、更に多くの被験者に対して調査する必要があるだろう。

接続詞のような独立性の高いものは、ドリルなどもあまり十分には行われにくい。また、従来の教科書の多くは、接続表現は中級以上になるまであまり取り上げていないようである。学習者がまだ、複文産出のレベルに至っていない場合、特にスピーチやストーリー・テーリングのようなタスク遂行には「接続詞」の習得が必要である。しかし、接続表現が用いられなくても、「とー」のような代わりとなる表現や前文までの流れから聞き手がくみ取って、コミュニケーションをはかることが可能であるが故に、接続詞が使われず、代わりに「と」や「じゃあ」が誤って使用されていても看過されやすい。「と」や

「じゃあ」を使用していた学習者がいつごろから接続詞を使用するようになっていくのかを、今後も見ていきたい。今回初級後半の学習者の接続詞使用とその代用としての機能を持つ「と」と「じゃあ」を分析したことで学習者の中間言語の発達過程の一端が解明できたと考える。

注

- 1) 本研究では、学習者が接続マーカ、すなわち、接続詞またはそれに準ずる「と」や「so」を使用している以外は、分析の対象から除外した。順接・添加の接続表現には「明示的に文と文の連結関係を表わす機能をもつもの」と「対話の円滑な促進のため、対話者の援助や理解を求めるフィラーに似た機能」とがあると考え。ただし、後者の場合にも何らかの連結関係を意識しているものと思われる。本研究では「と」が「接続詞の中間言語」か「フィラー」かを判定することはせず、「フィラー的な接続表現」も敢えて一緒に分析した。
- 2) CRはconsciousness raisingの頭文字。ここではCRは接続表現の知識を整理するだけでなく、学習者の接続表現の中間言語を体系的に整理したものを提示し学習者にも誤用分析にかかわってもらった。それにより学習者が自分の学習プロセスや学習方略についても意識化できることを目指した。
- 3) 「↑」は上昇イントネーションを、() は会話の相手の発話を表わす。
- 4) 本稿は「じゃあ」の機能を分類することを目的とはしていないため、学習者の使用例をもとに、それに適当な機能を主に浜田(1991)、桑原(1995)から当てはめ、いくつかの項目を追加して「じゃあ」の機能として分類した。
- 5) 桑原(1995)では「応答の一時的保留」としているが、本研究では「応答」だけでなく、一人の話し手の発話内に現われる例のような一時的保留もここに含めた。
- 6) 桑原(1995)では自分の発話を自分で訂正しているものについて述べているが、本研究では相手の訂正を受けて訂正している例のようなものも含めた。
- 7) 授業では1回目以前に「じゃあ」を提示している。

参考文献

- 1) 江原有輝子(1995)「メキシコ人学習者の日本語習得とその問題点」
お茶の水女子大学人文科学研究科修士論文
- 2) 熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における『はい』と『もしもし』
と『じゃ』の談話分析」『日本語学』11-9
- 3) 桑原京子(1995)「初級日本語学習者によるあそびことば使用の縦断的
観察」お茶の水女子大学人文科学研究科修士論文
- 4) 長友和彦(1995)「第二言語習得における意識化の役割とその教育的
意義」『言語文化と日本語教育』第9号 凡人社
- 5) 浜田麻里(1991)「デハ」の機能—推論と接続語—『阪大日本語研究
3』大阪大学文学部日本語科
- 6) ひけひろし(1985)「「そして」と「それから」」『教育国語』83
- 7) ひけひろし(1986)「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』86
- 8) ひけひろし(1987)「「それで」「だから」「したがって」」
『教育国語』88
- 9) 広利正代(1993)「初級日本語学習者の接続詞・複文構造に関する縦断的
習得研究」お茶の水女子大学人文科学研究科修士論文
- 10) Schiffrin, D. (1987) Discourse markers. Cambridge Univ. Press

(坪根由香里：国際基督教大学、坂田睦深：お茶の水女子大学日本言語文化
専攻1年)